

徳富蘇峰記念館

目録 — (24)

書簡と資料からみた大東亜戦争

展示期間◇平成十九年一月五日(金)〜十一月三十日(金)

本年の特別展は、当記念館に所蔵されている書簡や資料からみた大東亜戦争である。

徳富蘇峰は昭和十七年 日本文学報国会、大日本言論報国会会長に就任した。昭和二十年八月十五日、日本無条件降伏、戦争終結の詔書が玉音放送され、蘇峰はこの放送を山中湖畔の双宜荘で聞き、毎日新聞社社賓及び大日本言論報国会会長の辞任を表明した。三日後の十八日より自己の心境所見を後世に残すために『頑蘇夢物語』の稿を起した。この口述は昭和二十二年七月三日まで四〇六回継続された。八月二十日には「老蘇」の号を中止し、その後は「頑蘇」を用いた。九月二日、自ら戒名を「百敗院泡沫頑蘇居士」と誌した。その年の十二月二日にA級戦犯容疑者に指名され、閉門蟄居の身となった。昭和二十一年 自宅拘禁となり、二月十五日 嫡孫・敬太郎氏に家督を譲り、貴族院議員、帝国学士院会員の辞表および勲二等文化勲章返上の手続きをした。二月二十八日には「法廷に立つ気持」の稿を起し、三月九日を以って終える。昭和二十二年三月十八日、東京裁判法廷に提出した「法廷供述書」がウェブ裁判長より却下された。この「法廷供述書」は昭和三十一年十二月十五日「宣戦の大詔に偽りなし」の題で、『日本週報』に掲載された。昭和二十二年九月一日、戦争容疑者自宅拘禁を解除され、二十一ヶ月ぶりに晚晴草堂の門を開き、昭和二十七年四月十八日に公職追放が解除された。

ジャーナリスト・言論人であり、歴史家であった徳富蘇峰が再度見直されている昨今、このテーマの特別展示を企画した。

〔明治文学全集34 徳富蘇峰集〕一九七四年 筑摩書房 和田守編「年譜」・
『徳富蘇峰終戦後日記—頑蘇夢物語』二〇〇六年 講談社 参照

① 終戦前の蘇峰の言動

天皇への上奏と鈴木首相への提言

上奏原稿

(直筆草稿 巻紙 墨書 18×271.4cm)

征戦三年將兵庶民今日ノ危急ニ到ル。是レ皇国史上未曾有ノ大變
今其ノ由来ヲ原ヌルコトハ姑ラク置キ此ノ打開ノ方策ハ一二陛下ノ明治
天皇戊辰ノ皇讓ニ則リ天下ニ向テ更始一新ノ大号令ヲ発シ玉フニアリ
大権ノ発動ニヨリテ從來ノ諸制度ヲ中止シ或ハ全廢シ 太政官ヲ設ケ陛
下御親政ノ下ニ万機親裁皇軍親征英ヲ中外ニ示シ玉フニアリ
臣等陛下ノ聖意ヲ知ル。然モ此上更ニ陛下ニ此ノ如キコトヲ請願スルハ
寔ニ故元田永孚力孤忠ヲ明治天皇ニ獻ケ奉リタル心事ト同一ナリ
人或ハ皇室ノ政治ニ御干餘アルヲ以テ累ヲ皇室ニ及スト云フ 然モ此ノ
国土ハ皆陛下ノ高祖高宗以來無窮ニ把持シ玉フモノナリ。此ノ一億ノ臣
民ハ陛下ノ臣民ナリ 而シテ其ノ中枢核子タルモノハ歴世忠良ノ臣民ナ
リ。而シテ天皇ノ神聖ニシテ犯スヘカラサルハ憲法ニ明記スルノミナラ
ス肇國以來不磨ノ典則タリ
臣等尚進言セントスル所甚タ多シ 然モ先ツ其ノ大綱ヲ挙クレハ其目自
カラ張ラン 是レ粗枝大葉ニ止ル所以ナリ 陛下幸ニ微臣等ノ孤忠ヲ察
シ速ニ驚天動地ノ聖断ヲ下シ給ハンコトヲ臣等恐懼懇求ノ至リニ堪ヘス
昭和二十年二月 言論報国会長 徳富猪一郎

鈴木首相閣下ニ与フルノ書

(自筆草稿 巻紙 墨書 20cm×331cm)

鈴木首相閣下

日夕御尽瘁真ニ感佩ニ勝ヘス。迂生毛年齡ニ於テハ閣下ニ一日ノ長アリ、
仍テ老人ノ心理情態ハ聊力能ク之ヲ知ル。閣下ニ対スル同情ノ深厚ナル
ハ当然ニ候。天下ノ大勢岌々乎弊船ニ坐シテ大瀑布ヲ下ラントスルニ似
タリ。之ヲ救済スルノ道只タ一。天ノ岩戸ヲ押シ開ラキ 至尊御出現一
君万民ノ実ヲ御奉行アラセラルルコト是レノミ。今ヤ日本國ノ病ハ骨髓
ニアリ。若シ今日ノ機ヲ誤ラハ独乙ノ覆轍ヲ履ムモ未タ知ルヘカラス。
迂生ハ決シテ危言激語以テ閣下ヲ諷刺聳動セントスルニアラス。惟フニ
世上ノ嘉言善行美事快業所謂光明ノ半面ハ閣下ノ熟知スルトコト迂生ノ
歎々ヲ須タス。サレトソノ半面ハ奈何。迂生ハ独自ラ慙愧ニ禁ヘス。国

家危急存亡ノ利那二際シ情氣満々敗戦思想ハ社会ノ公私上中下ノ各層ニ滲透充実ス。閣下若シ彼等カ仮面ヲ脱シソノ本音ヲ吐クヲ聞カンニハ愕然自失スルモノアラシ。今ヤ国民義勇隊ナト出来セントスルモコノ儘ナラハ若干ノ例外例アリトスルモ恐ラクハ鳥合ノ衆ナランノミ。今真ニ国民ヲ覚醒シ国民ヲ蘇生シ国民ヲ清新活潑ニシ護國ノ勇氣凜烈タラシムルノ道ハ至尊自ラ大号令ヲ渙発シ玉フノ一アルノミ。如何ニ閣下カ千言万語シテモ今日ノ官吏ハ閣下ノ思フ様ニハ動カス官更尚然リ。況ンヤ国民ヲヤ

政府ノ信ヲ国民ニ失フヤ決シテ一日ニアラス。政府ト云ヘハ文武ヲ合シテ同様ナリ。特ニ昨今配給一割減ノ如キ前農相之ヲ保証後農相之ヲ覆ヘス転瞬ノ間掌ヲ反ハス力如シ天王山ノ文句モ亦同様ナリ。惟フニ何人カ政府ニ立ツモ到底此ノ国民ノ心ヲ新タニシコノ国民ノ心ヲ一ニスルコトハ至難ナラン。然モ天日一照乾坤頓ニ光輝ヲ生ス。多言ヲ俟タサルナリ。迂生ハ元來対米英戦争ノ熱心ナル主張者タル程ノ力ナキモ。ソノ賛成者ニ相違ナシ。自ラ責任ヲ感スル重且緊若シ独乙ノ覆轍ヲ履ム力如キアラハ万死余罪アリ。故ニ身草沢ニ在ルモ其ノ深憂遠慮ハ決シテ台閣ノ諸公ニ讓ラス是ヲ以テ叨リニ僭越ヲ顧ミス誨ヲ閣下ノ左右ニ請フ区々微衷御亮察アラハ幸甚。 昭和二十年七月十六 徳富猪一郎 鈴木首相閣下

② 敗戦直後の蘇峰の気持ちと戦後の感慨

蘇峰は敗戦後の気持ちを「忠憤衝天」と題して、表現していた。ひとつは昭和二十年九月十三日に詠んだ狂歌十一首であり、もうひとつは九月二十一日朝に書いた漢詩である。狂歌は巻紙に勢いよく書かれていて、敗戦後のあまりにも変化した日本や国民の姿を蘇峰自身「短歌に非ず、俳謡に非ず」と戯歌として詠んでいる。漢詩はこたつ板の裏側に書かれたものである。

「忠憤衝天」

(自筆草稿 巻紙 墨書 33×1200cm)

昭和乙酉九月十三於岳麓双宜荘 頑蘇逸民

言者有罪聽者不足為誠無用之閑文字可深秘焉 頑蘇誌

言問はむ国を賣利たる大臣等は 猶此上仁賣留物阿理や

赤毛来る 猶太茂来礼波 黒毛来流 青きは独季民艸能色
昨日摩天 東亞乃盟主日本 呂宋 布哇能仲間入須流
昨日摩天 モンペー 著けた乙女等波 スカート蹴利天サンキューと呼舞
天照ラス 神乃日嗣能天皇波 醜夷ニ降伏登宣ひ玉いぬ
味気なや 嗚呼味気なや味気なや 独り眺むる大空能不二
何事茂 変利果たる世の中に 昔ながらの富士能神山
昨日まで 日本主義乃鼓吹者は 世界文化の先達登奈留
今更に何を語ら舞吾かこころ 知るや知らずや 不知火の友
蔽蔽以る 野辺も山辺茂荒礼に計理 霞越吸ふ天 生く由しも加奈
以上非短歌 非俳謡 文字粗笨 詞句唐突 真是艸笨 逸民之衝口
而発者也 偶録似 静峰賢友 賢友深秘百年之後 世或有解之者云尔
頑蘇又識

「忠憤衝天」

(コタツ板の裏側に書き込まれた漢詩 自筆 墨書 87×87cm)

血涙難為揮 丹心白首違 滄桑轉瞬變 八十三年非 客來談世事 世事不勝煩 相送衡門外 青山笑不言 君看屋上旗 飄颻任風吹 借問男兒國 何人有骨兒 狡兒弄大機 納欵關中飛 憐殺七千万 誰采首陽薇 昨非復今是 何處有真機 誰識是非外 白雲頭上飛 頑蘇八十三 於岳麗忍辱奄 昭和二十年九月二十一冷雨蕭條之朝 頑蘇老人

(読み下し) 血涙難が為めに揮ふ 丹心白首違ふ 滄桑轉瞬の変 八十三年の非 客來つて世事を談ず 世事煩に勝えず 相送る衡門の外 青山笑つて言はず 君看よ屋上の旗 飄颻として風の吹くに任ず 借問す男兒の国 何人が骨あるの兒 狡兒大機を弄し 欵を納れて關中に飛ぶ 憐殺す七千万 誰か首陽の薇を操る 昨は非にして復今は是 何れの處にか真機ある 誰か識る是非の外 白雲頭上に飛ぶを。

③ 双宜園秋色絵巻

「双宜園秋色絵巻」 福田眉山画

(サイズ37×1370cm)

昭和八年、富士山麓電鉄の山中湖畔の貸し別荘を双宜荘と名づけ、蘇峰は以後毎年夏をここで過ごした。展示した絵巻は日本画家・福田眉山が昭和十九年頃、双宜荘の秋景色を描いたものである。双宜荘の名前の由

来ともなつた、富士山と山中湖の二つの美しい風景を見ることが出来る。絵巻の中には蘇峰の姿が二箇所描かれている。

④ 戦前・戦中・戦後 蘇峰に宛てられた書簡

松岡 洋右（一八八〇—一九四六 明治十三—昭和二十一）山口県。外交官・政治家・満鉄副総裁。渡米しオレゴン大（アメリカ）で学び、帰国後外交官となる。日本の国際連盟脱退、日独伊三国同盟の締結、日ソ中立条約の締結など「松岡外交」を主導したが、破綻し失脚した。松岡洋右の蘇峰宛書簡は十四通ある。本年度展示した昭和十六年十二月十日夕に書かれた鉛筆書きの書簡は新出書簡である。

（この新出書簡に関する高野信篤氏の論文は、藤原書店の学芸総合誌・季刊『環』二十八号に掲載される。）

◇昭和十六年十二月十日夕付

開戦第一日丈の収穫にても、ど偉い事で、恐らく世界戦史特に海戦史上空前の事でせう。「ル」大統領色を失ふと、傳ふ。左もありなん。今日又「シンガポール」にて英の東洋艦隊主力撃滅、マニラ上陸、マレー上陸、実に痛快、壮快！無論戦争はこれからで、十年の覚悟なかるべからず。これ位で餘り喜んでほならぬが、併し緒戦の大々の快報、何と申しても御互に慶せざるを得ませぬ。伊勢大廟を遠く拝せざるを得ませぬ。恐らく英、米の上下を震撼してでせう！独と雖ブリッツグリーグ「ブリッツクリーク・Blitzkrieg」の株を奪はれた感じがしてでせう。これで日本も独から見ても^{てい}呂の重きをなした。ソ聯も対英米關係に於て、これで牽制出来る^{てい}と信じます。

極秘 御読後御焼棄請ふ（外交上卑見は一体禁物なれば）

〔注：この一行は赤鉛筆で書かれている〕

一、今日ラヂオを通じて御講演を拝聴し得ざりし事 返す返すも残念です。
二、何と言つても米・英殊に米に向つて思ひ切つたる宣戦布告の挙に出でたる事により、どうやら大和民族は其世界的使命に堪ゆべく更生の途上に確實に就きしやう感ぜられます。

三、指摘する迄もなく、先生の慧眼、日米交渉顛末公表御一瞥丈にて、如何に日本が愚弄翻弄せられたるか御看取相成りたる事と存じます。凡そ

交渉と云ふものは双方（殊に大国の間にては）が一步一步交渉の進むにつれ互譲すべきであるに拘らず。右日米交渉に於ては一步一步、案を修正する毎に米は露骨となり、段々と、より強硬にして日本に不利なる申立てを行ひ、非禮暴慢を極めた。拙者退官以来の経過は生不聞、併し今回の公表を見て生の想像の当り居たりしを知りました。実に言語同断なる讓歩にして若し、米大統領が一と先づ之を承諾したりしならばと想ふと、今でも膚に粟を生じます。併し皇國に天佑がありました。あんな自惚れの強い馬鹿な先生が交渉の相手であつた事が何よりの天佑でした。（便箋欄外の書き込み）
小生在官終末二近き頃、驚くべき経緯あり。（秘しあり）コレを志士知らば、眦を決せん歎！

四、もうどんな馬鹿でもさがが明かとなり（殊に米の腹が見え透いて来て）又私の到底堪えないことが明瞭となつてから、政府部内の或者等は「もうとうに腹はきまつているのだ。唯都合のよい時まで交渉継続で米を釣つてるのだ」と宣伝（申訳）した容子なるが、これ丈の腹をホントウに持つて事に當つて貰ひたかりしが、どたん場に迫りてのことは別として、こんな腹は何処にも初からありはしなかつたのです。こんな言ひ訳は虚言です。併し天佑がありました。こゝにいふ言ひ訳が真なりと想はる様な事態に独り手に落ち行きました。「さう落ち行くぞ」と私は本年五月己に予言して置きましたが、それは一つは天佑を信じたからです。

五、併し、それは、今となつてはどうでもよい。過去は一切水に流して、上下一致、この空前の難局に処し、一日も速に上御一人の御軫念を些少なりとも減ずる様努力せねばならぬ。向後尚英米が恋しいやうな人があらば、寸分の仮籍なく処分すべし。此上はもう「喰ふか喰はるゝか」といふ事が真であります。

六、脇目を振らず向ふ半歳唯闘ふの一事あるのみ、唯はあるのみ。其他は一切顧みず、唯戦へ、唯闘へ、闘ひ抜ひて勝て！来年六、七月頃から真の外交戦始まるべし。それまでは外交は不要！今日の事早かれ遅かれあるべき私の十数年来豫想（数十年来なれど、稍々具体的となり想や対策を練り始めたる時期を云ふ）し、具體的に戦争終止の時期、方法、要件にも疾く己に胸中自ら成竹があります。後日申し上げたいと思ひます。

七、翻つて外交がと言へば、此の半歳、如何なる事を忍びてもソ聯を英米、殊に米と此上接近せしめず、殊にソ聯極東地点を英米に利用せしめざるやう努むべきである。それは、今でも政府はやつて居るらしいが。

八、又独ソの關係は極めて微妙在之候不絶周密なる注意を払はねばなりませぬ。従つて独に対して此上の不信を働いてはならぬ。尤も今度の快挙で独国民の対日不信の感情は余程緩和したと観測致します。

特に微妙を極むる日独の關係、対ソ關係等は紙筆になすを不許、何れ後日口頭申上げます。

九、実は私は、今春以来陸相に向つては「支那事変が決して単独の問題として片付くものならざる事は予の持論なるが、最早何人にもそれは判つて来たらう。今に日本も真に世界戦争に乗り込まねばならぬので、支那事変なるものは、此時消えるのだ。唯世界戦争参加者たる日本としての大局に立ちて、支那の如何なる地域を如何なる方法又は形に於て、如何なる程度まで占拠せねばならぬかといふ様に考へ直し、我陣容をこの見地に寄りて、立て直さねばならぬ。それには重慶も蒋介石も何も無いのだ。」と内話し真剣なる注意を惹いて置いたのであります。一日東条陸相も同感の意を表したのであります。今や事態は此問題、此考へ方を現実的要求 (circumstances) して居ります。

(注) () 内の英語circumstancesは上から波線で消されている。事態の状況という意味を英語で書こうとしたものか)

十、東條首相を褒めてやつて下さい。(兎も角こゝまで漕ぎ付けた事は偉い) そして助けてやつて下さい。

十一、一昨日以来 上御一人の御軫念の程を乍陰察、病室に晏如として居られず、医師等には秘密に、家人は叱り付けて、昨日天機奉伺記帳の爲(禁を破りて) 宮中玄閑迄伺候して参りました。序に、奥に這入り、木戸内府に面会して記帳の爲罷出でたる事を告げてをきました。国務とは申しながら、余りにも自分の身体を虐待して之を損じ、空前の此の秋、何の御役にも立ち得ざる事、真に陛下に申訳なき儀に存じて居ります。区々の衷情御憐察を仰ぎます。併し前述の通り半歳は大丈夫御用はない、兵隊の分野だと思ひます

乱筆御判読奉仰候

十二月十日夕 洋右

(注) 封筒なし 鉛筆書き 便箋14枚

◇昭和十九年八月二十二日付

御恵送のポテト小生の大好物、先生の御苦、心喜に賞味可仕候矣
敬復者 残暑却而嚴敷折柄御障も無之奉慶賀候 次に迂生不相変尚病餘の衰弱何の役にも不立 唯日々皇国の危険を目の前に憂を深ふ致候而已に御坐候

御憐憫奉仰候 扱て只今塩崎秘書を以て尊翰にて御慰問を忝ふし奉鳴謝候 小生も尚一二年ハトモ活動は出来間敷候 若し夫れ御下問の事の如きはも早人間の智慧や才覚には不変 人類の歴史上かゝる大事変は百萬年間度々存したるべく、而して独が参るか、我亦滅ぶるか神以外判らず、唯小生は神の意の天地に行はるべく、且神州不滅を確定、此節は唯々天意に安じ居申候 我國時人不甲斐なきは御仰せの通りにて 真に慨嘆に不堪候得共、之も此場合如何とも出来ず 是亦天命也 稜威に依るの外無之候 実に不甲斐なき事ながら小生等の心境ハ唯々此矣 スグ前の別荘に過般頭山翁来り居られ時々往復、コレハ小生此際せめての慰安に御坐候御拝する丈にて沈静劑と相成申候 実に不甲斐なきお答 何とも申訳無之候 唯言外の意御察し被下度 其内残暑御いとひ被下度 先是御返事迄 匆々

十九年八月廿二日

蘇峰先生 侍史

洋右

敬具

右手尚不自由、御判読奉存候

(注) 封筒表 山中湖畔双宜荘 徳富先生侍史 貴答親展托塩崎君

(赤鉛筆で松岡氏と書き込み)

封筒裏 御殿場町東山 松岡洋右

中野 正剛(一八八六—一九四三 明治十九—昭和十八) 福岡県。大正・昭和期の政治家。「東京朝日新聞」記者時代、護憲運動に活躍。「東方時論」主筆。蘇峰と中野正剛は二十三歳の年のひらきがあるが、中野の人なつこい性格は齡をこえて友情深いものになった。「国民は先生の態度を注目している」と蘇峰の責任ある行動の重要性を指摘している。

◇昭和十七年二月—七月「推定」(大政翼賛選挙についての所感・全文)

拜啓 政府内の官僚ブロックと、政界のルンペンとにより策謀せられた

る例の推薦母体は、誠に言語断絶の存在にて、それが政事結社となりて、官製選挙をなすなど、国民を愚弄するの甚しきものと存候。本質的に見れば英米依存体制の強化策動たり。これが一步前進すれば、大東亜戦争を裏切るやうな空気を醸成すべく、前途深憂に勝へず候。従て名士の名を聯ねて暗取引にて、醜陋なる術策を弄せんとするもの也。先生は斯の如き変てこなる政事結社などに煩はされざる様、即刻御辞任ありて然るべしと存候。一日席に聯ならるれば、一日彼等の為に利用さるゝこととなるべし。国民は先生の御態度に注目致居候。不盡 徳富先生 侍史
中野正剛

(注) 封筒表 民友社 徳富蘇峰先生 親展 筆書き

封筒裏 中野正剛

緒方 竹虎(一八八八〜一九五六 明治二十一〜昭和三十二) 山形県。ジャーナリスト・昭和時代の政治家。昭和十九年小磯内閣の國務相兼情報局総裁に就任し、戦時下の言論統制にあつた。戦後責任を問われて公職追放。戦後の東久邇内閣で國務相兼内閣書記官長として敗戦処理内閣の運営に奔走した。昭和二十九年自由党総裁に就任し、昭和三十年保守合同後自民党の総裁と目されていたが急逝した。展示書簡は、言論人として正力松太郎・高石真五郎らと共に結束しようとする力を感じる。

◇昭和十九年七月五日付

拝啓 先週土曜日 正力氏と会見 月曜日 田中新聞会長と会見 昨火曜新聞会に田中正力 高石 大野諸氏の参集を請ひ 御高論を披露して 決起を促し候処 皆々趣旨に於ては大賛成 先づ手始めに東條内閣の注文引受所たる阿部大将と会見 言論人としての忌憚なき意見を披瀝することに決し 明六日大将を訪問する段取と迄相成候 先生の謂ゆる「虎髯を將つ」感無きに非るも 手始めとしては此辺にてもかとも考へ候 其際高石氏より 先生玉稿に閲し 当局と折衝の経過を聴取 高石氏に乞ふてゲラ刷をも拝見仕候処 実に近來の大文章にて 今日吾々言論人の意衷を尽して一字の加ふるもの無御坐候 何故にこれを紙上に掲載せしめざりしか 端的にこれが時局を今日に致したる所以 生死巖頭に立ちながら 人心の燃え立たざる所以 言論人の黙止を許さざる所以と存候 阿部大将と会谈の結果如

何によりては 老先生の御出慮を請はざるを得ざるもあるやも知れず予め御合置奉願候 軍官民共に尊陛下の赤子たるに於て 寸分の差違なし然るを日支事変も 大東亜戦争も 銃後の事も 軍官のみにて 民を無視し而も軍々官々にばらばらに小是非 小分別に日を暮したる結果が今日の為体にて痛憤此事に御坐候 阿部大将と会見後間を見て 拝訪親しく御高教を仰ぎ度為邦家一層御加餐万祈候、草々不一
七月五日 緒方竹虎

(注) 封筒表 熱海市伊豆山押出一一九 徳富蘇峰先生侍史

封筒裏 東京都麹町区有楽町二丁目三番地 朝日新聞東京本社

緒方竹虎

正力 松太郎(一八八五〜一九六九 明治十八〜昭和四十四) 富山県。昭和期の政治家・実業家。内務省に入り、敏腕な警察官僚として活躍した。後藤新平の資金援助で、読売新聞社の経営権を取得し、社長に就任した。終戦から七十日後に読売第一次争議が起き、十二月十二日後任の社長を馬場恒吾に依頼して、戦犯容疑者として巣鴨に収監された。約一年九ヶ月後に不起訴で釈放。その後、昭和二十四年にはプロ野球の二リーグ制を提唱し、二十八年には日本テレビ放送を開始させた。蘇峰は二十九年に、正力の案内で新設のテレビ塔を見学した。

◇昭和二十年九月五日付 速達

先生 御親書有難う御座ります、時局に就きましては、無念の二字の外申上ぐる言葉もありません、只だ今更ながら軍略と政治との一致せざりしこと、軍、官共に指導者に実力を欠きしことは残念であります、次に弊社も八月十五日正午以来、御茶の水の地下工事を中止しました。目下読売別館(旧報知社屋)と本館の復旧に毎日百名余の鉄工、大工、人夫が働いております。本月十五日に別館に移転し編輯局、業務局、工務局の事務を執ります、同社屋は幸に地下、及一階、二階が焼失せるも三階四階 五階が無事でありましたので、地下室、一階、二階の復旧共に三階以上の貸室の人々に明渡しを受け之を使用することと致したのであります、輪転機は十七台を焼失しましたが幸にも一生懸命の努力にて本月末少くも四台の高速度輪転機を読売本館の工場に於て運転開始の運びに至るかと思ひます、何卒ご安心ください。左様なら 敬白 正力生

(注) 封筒表 富士山麓山中湖畔旭日丘 徳富蘇峰先生
封筒裏 東京都京橋区築地本願寺内 正力松太郎

5 蘇峰所蔵のさまざまな地図

◇「阿蘇周辺図巻」

(巻物 230×50cm)

作者の吉田初三郎(一八八四〜一九五六 明治十七〜昭和三十一年)は、鳥瞰図絵師として有名である。京都に生まれ、洋画家・鹿子木孟郎の弟子となった。「阿蘇周辺図巻」は蘇峰の故郷・熊本本の阿蘇周辺を蘇峰の依頼を受けて描いた鳥瞰図。絵の右上には初三郎の筆でこの鳥瞰図を描くに至った経緯が左記のように書かれている。

本図八紀元二千六百五年皇国未曾有ノ国難大東亜戦争第五年ノ早春即チ昭和二十年其二月二十二日東海熱海晩晴草堂ニ存セル徳富蘇峰先生ヨリ当時純忠菊池一門ノ史跡図謹筆ノタメ熊本縣芦北郡佐敷町ニ止宿中筆者宛御高信ヲ以テ先生六十年ノ御旧作ノ分 蘇蘇在雲間 極目原頭倦鳥還欲向相知問消息 秋風吹夢落家山ノ御詩ニ添ヘテ熊本市東郊ヨリ見タル阿蘇外輪山其他周辺ノ光景ヲ 初三郎一流ノ鳥瞰描写ヲ以テ執筆セヨ 坐シテ家山ノ風光ニ接シタシトノ有難キ御懇囑ヲ拝シ襟ヲ正シテ謹諾其尊キ知己ノ御鴻恩ニ感泣シ

学聖のみこと可しこみ 死も生も絵筆に捧げ 可へりみはせじ 学聖の尊き御旨つらぬ可む 與一の弓を恵みませ神

ノ一首ヲ捧ゲテ 筆者ノ恩師曾て明治神宮へ奉天入城図ヲ謹筆献画セラレタル故鹿子木孟郎先生ノ靈前ニ報告 而シテ其記念スベキ陸軍記念日三月十日佐敷ヲ出発 阿蘇神社ニ参拜 本図ノ大成ヲ祈願 宮司到津男爵ヨリ特ニ社寶阿蘇神社ノ古図ヲ拝観参考トシテ是ヲ謹寫 而モ当時戦局ハ重大苛烈踏査写生ノ交通ニモ頗ル困難サレドモ屈セズ 強行シテ佐敷ニ帰宿本図ノ構想ニ専念シ同年三月三十日ノ盛春風光明美ナル先生ノ御郷里水俣ニ行キ徳富家御歴代ノ墓域ニ参拜 本図完遂大任ノ御守護ヲ折念爾來常ニ敵機ノ頻襲下朝夕ノ爆音ヲ友トシテ着々構図ヲ進行 即チ画面ハ先生曾テノ御紀行文阿蘇五岳ノ一節ニ

『阿蘇群山ノ一角カラ外輪山ヲ大観スレバ実ニ美絶麗絶雄絶壯絶何トモ言葉ニテ説明シガタキ快味ガアル 世ニハ奇字ナク警句ナク 一行一節ノ上カラ見レバ 平々凡々ダガ其全体ニ於テ急潮ノ推シ寄セ来ルガ如キ

洪濤ノ逆捲キ来ルガ如キカアル大文章ガアル 阿蘇モ亦造化ノ大文章ダ之ヲ妙義ト力耶馬深ト力一邱一壑カラ見ルモノト 比照スルハ全く其見当ガ違ウテイル 阿蘇ノ妙ハ阿蘇全体デアル 阿蘇ノ風光ヲ賞セントセバ之ヲ大観セネバナラヌ・・・』

トノ御高説ヲ基礎トシテ執筆スクテ同年四月以降戦局ハ更ニ緊迫殊ニ沖繩破レテ以来ハ文字通り九州ハ第一線ノ戦場トナリ 日夜連続燈滅防空ノ為メ彩管亦心ニ任セズ加フルニ佐敷ノ飯室附近ニハ国鉄佐敷川ノ鉄橋アリ 相次グ来寇凄絶ヲ極メ室画至近ノ周辺ニ於テ実ニ前後五十八発ノ大兇爆アリ 遂ニ同年八月十日同鉄橋ヲ破壊 此日画室十歩ノ軒ニ巨彈ヲ受ケ家屋半壊 室内無數ノ弾片削烈セルモ 筆者幸ヒニ其前日本図大体ノ着色ヲ了シ当時不思議ノ天佑ニ恵マレ執筆以来初メテ附近ノ防空壕ニ退避 瞬時ノ差ヲ以テ萬死ニ一生ヲ得タルモ如何セン 本図画面ノ一部ハ其弾片ニ貫カレ裂傷ト同時ニ屋外ヨリ激甚ナル爆風ト共ニ強烈ナル煙哨及ビ稲田ノ泥水ヲ全面ニ浴ビ色彩ノ上ニ毛意外ノ変色退色アリ筆者傷心限りナク スクシテ更ラニ痛恨慟哭ノ終戦八月十五日ヲムカヒ一時ハ茫然自失セルモ畏キ詔勅ノ前ニ肅トシテ襟ヲ正シ泰然トシテ道心ニ立脚全カ力尽シテ専ラ画面ノ補色ト修正ニ邁進 同年十一月二十三日新嘗祭ノ佳節ヲ以テ筆ヲ納ム 尚本画面中八方岳附近ノ裂傷ト鞍ヶ岳ニ遺ル泥ノ飛沫ハ其俣後世ヘノ記録トシテ示シノコス事トセリ

初三郎 謹寫

◇「陸軍作戦要領図」

(自十二月八日 至十二月十四日)

昭和十六年十二月陸軍省印刷 52×50cm わら半紙
赤字で「禁発表」と印刷されている。

インドシナ、タイ、スマトラなどが書き込まれた地図上に「上陸」「爆撃」「占領」などの作戦内容が印刷されている。例えば、中国大陸上には「在支敵国権益接收九日中ニ完了」、フィリピン、シンガポールの地図上には「八日朝ヨリ爆撃」などと書かれている。

◇「敗戦直前の宣伝ピラ」

終戦直前・直後に投下されたピラには、日本側がまいたものと米国側がまいたものがあり、日本が投下したものには、徹底抗戦を主張するものと戦争を止めようとする二種類があった。今回は、米国側のピラを展示した。

「日本軍部指導者諸君」と呼びかけたものには、表に東條英機ら軍部指導者の顔写真が並び、「諸君は日本の国土、海域及び上空を防衛し得ると、日本国民を信服させる事が出来るだろうか」と問いかけ、裏面には、トルーマン大統領の写真付きで「諸君の将来は君達自身の手中に在り、諸君は多くの兵を無駄で醜い死に投じるか、或は又名誉ある平和を採るか、その孰れかを選び得るのである」としている。また拾円紙幣に似せたピラの裏には、「軍閥が支那と戦争をはじめていなかった昭和五年には十円で次の物が買えた」と具体的に品目を並べ、指導者の言う共業圏の成り行きは、結局こんな事態を招いたと訴えている。

当時宣伝ピラを拾った者は、即座に警察に届けなければならなかったが、蘇峰のもとには、さまざまピラが資料として届けられ、茶色の封筒に「米国伝單」と記して、保存されていた。

⑥ A級戦犯からの書簡

東條 英機（一八八四～一九四八 明治十七～昭和二十三年） 東京 昭和期の陸軍軍人（大将）、政治家。昭和十六年、第四十代内閣総理大臣。昭和十九年七月総辞職。A級戦犯に指名され、極東軍事裁判において、最高戦争責任を問われ、昭和二十三年十二月二十三日に絞首刑となった。享年六十四歳。

◇昭和十五年八月七日付

謹啓 三伏ノ候益々御清適為邦家慶賀至極ニ存シ上候 扱テ先般ハ御自作ノ名詩二篇御揮毫 大石氏ニ御托シ被下 御芳情難有拝受致し候

就任早々同氏ヲ介シテ會心ノ御忠言銘肝罷在候段重ネテ 御厚情深謝仕リ候 君國ノタメ全力ヲ盡シテ所信ニ邁進御奉公ノ誠ヲ致ス以外何物モ無之候幸ニ御協力ハ 神助其ノモノト存シ居リ候 何卒先生ノ御自愛切望ニ不堪候 何レ拝眉ノ機ニ御禮申上タキモ不取敢 書中ヲ以テ 如斯ニ御座候 敬具

(注) 封筒表 静岡県山中湖畔 双宜荘 徳富蘇峰先生

封筒裏 東京都麹町区永田一ノ一 東條英機

小磯 国昭（一八八〇～一九五〇 明治十三～昭和二十五年） 栃木県 第四十一代内閣総理大臣。昭和二十三年、A級戦犯に指名され終身刑とな

り、昭和二十五年巢鴨拘置所内で病死した。享年七十歳

◇昭和二十五年六月六日付

拝復 尊翰難有拜誦 老臺愈御壯剛先以て珍重に存候 御来示に依れハ左臺亦一昨年御令室を喪はれ候趣新なる体験者として衷心捧哀悼の誠申候 寂寞感の駄作左記未定稿御笑被下度候

虚風無道恨難消 一過散花香寂寥 猶有縹緲株守漢 空追警氣望雲霄

敢て獄中餘情を省略し御懇書御禮耳 如斯候 敬白

小磯国昭 六月六日

徳富先生 玉几下 東京都豊島区山槻 西巢鴨拘置所

小磯国昭 六月六日

(注) 封筒表 静岡県熱海市伊豆山押出 徳富猪一郎様

封筒裏 東京都豊島区西巢鴨拘置所 小磯国昭

大島 浩（一八八六～一九七五 明治十九～昭和五十） 岐阜県 陸軍軍人・ドイツ大使。ナチスドイツと日本の親交に尽力し、日独伊三国同盟の立役者として知られる。戦後、東京裁判でA級戦犯（終身刑）の判決を受けた。

◇昭和（一）年一月二十九日付

謹啓 御清祥奉賀候 陳ば柴田氏を経て御示しの御高見誠に難有拜誦仕候 出発前拝趨仕度候存じつつ其機を得ず遺憾千萬に御坐候 但し御意圖は十二分に承知罷在り一身を賭して大東亜共栄圏に寄与可致覚悟に御坐候 何卒国内の御指導願上候 尚御自愛の程切に願上候 敬具

(注) 封筒表 徳富猪一郎先生 切手無し

封筒裏 大島浩

荒木 貞夫（一八七七～一九六六 明治十～昭和四十二） 東京 大正・昭和期の陸軍軍人（大将）。政治家。陸軍内のロシア通として知られる。

昭和十三年第一次近衛内閣の文相となり、徹底した軍国主義教育を推進した。極東軍事裁判でA級戦犯として終身刑を宣告されたが、病気で仮出所し、その後保釈された。

◇昭和（一）年八月二十五日付

肅啓益御清穆結構至極に存候 過般来山中湖畔に滞在小川氏を通し御起居拝承 其上小供迄罷出御手厚き御もてなしに預り感謝此事御坐候

其内是非一度拝趨御高談承度存居候虞公私用務に妨げられ不果其意終に昨日引上歸東仕候次第誠に遺憾に存候毎朝天明の芙蓉峯を仰きつゝ俗物を洗ひ静かに無私の境地に思索に努め高所大所よりする時局觀に想をねり候得共何の得る所無之再ひ熱鬧の部門に入り申候 御笑ひ被下度候 先八寸楮御挨拶迄 何れ其内拝鳳萬縷其節に譲り申候 時節柄折角御自愛專一に祈上候

二伸 自然小川氏に御面晤の折八宜敷御鶴聲願上候
敬具

八月二十九日 荒木貞夫

德富蘇峯大人 坐下

(注) 封筒表 甲州山中湖畔 德富蘇峯先生 親展

封筒裏 東京渋谷区幡ヶ谷 荒木貞夫

◇極東國際軍事裁判所法廷席図解 (9.3×12.5cm)

裁判官十一名、被告人二十六名の名前が記され、裏面には傍聴の際の注意書が印刷されている。

◇蘇峰の戦後の供述・自述

「法廷に立つ気持ち」

昭和二十一年三月、蘇峰は戦犯に指名されることを想定して「法廷に立つ気持ち」の原稿をまとめた。「予は法廷に立つ事を希望する重なる理由の一は、君国のために其の冤を雪かんと欲する為である。」の書き出しで始まる。

「蘇峰翁自述」昭和二十年十一月二十八日、十二月三日
英訳は秋元俊吉と山県五十雄がかかわった。英文には付記もついている。

(和文) 和紙三千一枚こより綴じ
(英文) 和紙三千四枚こより綴じ

⑦ 女性の蘇峰宛書簡

東條 勝子(二八九〇〜一九八二 明治二十三〜昭和五十七) 福岡県

A 級 戦 犯

(○印は蘇峰宛書簡のある人物)

氏 名	役 職	結 審	没 年 月 日	死 因
○板垣征四郎	陸軍大将、関東軍参謀長、陸相	絞首刑	昭和23年12月23日	法務死
○東條 英機	陸軍大将、首相、陸相	絞首刑	昭和23年12月23日	法務死
土肥原賢二	陸軍大将、奉天特務機関長	絞首刑	昭和23年12月23日	法務死
○松井 石根	陸軍大将、中支軍司令官	絞首刑	昭和23年12月23日	法務死
木村兵太郎	陸軍大将、関東軍参謀長	絞首刑	昭和23年12月23日	法務死
○武藤 章	陸軍中將、比第十四方面軍参謀長	絞首刑	昭和23年12月23日	法務死
○廣田 弘毅	首相、外相、駐ソ大使	絞首刑	昭和23年12月23日	法務死
梅津美治郎	陸軍大将、参謀総長	無期禁固	昭和24年1月8日	服役中病死
○白鳥 敏夫	外務省情報部長、駐伊大使	無期禁固	昭和24年6月3日	服役中病死
○東郷 茂徳	外相、駐ソ、駐独大使	禁固20年	昭和25年7月23日	服役中病死
○小磯 國昭	陸軍大将、首相	無期禁固	昭和25年11月3日	服役中病死
○平沼騏一郎	首相、枢密院議長	無期禁固	昭和27年8月22日	仮出所後病死
○松岡 洋右	外相、國際連盟主席全権	未 決(免訴)	昭和21年6月27日	病死
○永野 修身	元帥海軍大将、軍令部総長	未 決(免訴)	昭和22年1月5日	病死
○南 次郎	陸軍大将、関東軍司令官	無期禁固(釈放)	昭和30年12月5日	逝去
重光 葵	外相、駐ソ大使	無期 7年(釈放)	昭和32年1月26日	逝去
○橋本欣二郎	野戦重砲兵連隊長	無期禁固(釈放)	昭和32年6月29日	逝去
大川 周明	右翼指導者	免 訴(釈放)	昭和32年12月24日	逝去
○畑 俊六	元帥陸軍大将、陸相	無期禁固(釈放)	昭和37年5月10日	逝去
○荒木 貞夫	陸軍大将、陸相	無期禁固(釈放)	昭和41年11月2日	逝去
岡 敬純	海軍中將、軍務局長	無期禁固(釈放)	昭和48年12月4日	逝去
佐藤 賢了	陸軍中將、軍務局長	無期禁固(釈放)	昭和50年2月6日	逝去
○大島 浩	陸軍軍人、駐独大使	無期禁固(釈放)	昭和50年6月6日	逝去
嶋田繁太郎	海軍大将、海相	無期禁固(釈放)	昭和51年6月7日	逝去
○木戸 幸一	内相、内大臣	無期禁固(釈放)	昭和52年4月6日	逝去
賀屋 興宣	東条内閣蔵相	無期禁固(釈放)	昭和52年4月28日	逝去
星野 直樹	満州国総務長官	無期禁固(釈放)	昭和53年5月29日	逝去
○鈴木 貞一	國務相兼企画院總裁	無期禁固(釈放)	平成1年7月15日	逝去

東條英機夫人。日本女子大中退。蘇峰は東條亡き後、時々勝子夫人にお小遣いを渡していたという。書簡からは、軍人の妻としての覚悟が伝わってくる。

◇昭和二十一年四月二十一日付

世は春の装ひ漸々こまやかに相成申候も本年八むつかしき事のみにて鶯の音の侘しさを初めて味ひ暮し居申候折柄其後御両方様いかゞ御消光遊され候や何上奉候 あるじあの様相に相成申候てより先生御身辺お案じ申上つゞけ居候もさしひかへ本日及び申候が大石様にうかゞひ大かたの御様子は承り及申居候 皇国の宝に在り候 先生の殊に御高齡とて御宅にて御静養は何よりと一安心申上居候もさぞかし御奥様には御心つかひと重々御察し申上候 東条はすでに生きのびすぎし只今にて覚悟致居候もお一かたにても御無事にとそのミ祈り居候ひしを存じ居候まゝ私もおなじ願いに祈りくらし居り候 呉々も御大切に御機嫌よく大切の場合に御のぞミ遊し候様願上奉候 先生の御丹精遊ばせし心血をそゞぎたまひしものゝ無事なれかしとも只管祈上居申候 何卒先生に山々よろしく申上たまはり度はるかに御左右をいのり暮し居り候 私事もあるじの命のとほりに深山住いたし一部落四軒のみの静かなる處にて土にしたしミつゝ あるじの苦を偲び遺家族の方々や戦災者の御苦難をしのびてハせめてもと最低度の生活の中に精一杯働き暮し心やりに致し居候 幸に一同とやかく健かにハ過し居り申候 まづハ右御機嫌うかゞひ申上度あらあら申上奉候 かしこ

四月廿一日 東条カツ

徳富先生御奥様 御前に

なほ表の事ハ一向に相分り申さず候へども東條が力たらでかく成り皆様に御迷惑おかけ致し候事かといつも申しわけなく存居候。

(注) 封筒表 静岡県熱海町 徳富蘇峰先生 令夫人様 御許にて

封筒裏 福岡県田川郡川崎町字安宅 小峠 東條勝子

吉屋 信子(一八九六〜一九七三 明治二九〜昭和四八) 新潟県 大正・

昭和の小説家。大正六年から「少女画報」に『花物語』を連載し、少女小説作家として出発。その後、「大阪朝日新聞」の懸賞小説に当選した

『地の果まで』などで長編作家としても知られた。戦時中高浜虚子に師事し俳句を学ぶ。徳田秋声らの知遇を得る。大正十二年一月、永遠の愛友、門馬千代と運命的な出会いをする。昭和三年、千代を伴い満州、ソ連経由でヨーロッパに渡り、一年近くパリ滞在。アメリカを経由して帰国。太平洋戦争開戦直前には、特派員としてインドネシア、ベトナムなども訪問している。

◇昭和十三年九月十七日付 上海よりの絵葉書

戦路を見て
城池百戦後 春舊幾家孫 處々蓬蒿徧 婦人抱淚看
支那人だったら、この詩を思つて泣くでせう。その気毒な心をいたわつて、日本にほんとに結びつきたいと、考へまして。

◇昭和十三年八月三十一日付 北鮮雄基にて 洗濯をする女性の絵葉書

ソ満国境軍の慰問に主婦之友より戻り、北鮮の洪水のあとを苦心して歩き 守備隊をおたづねいたし張鼓峯を眺めました。国境の原には秋草盛りでございます。

大山セイ 海軍陸戦隊の大山勇夫中尉の母。

昭和十二年八月九日 海軍陸戦隊の大山勇夫中尉と斉藤一等水兵が中国保安隊に射殺され、第二次上海事変が勃発した。

◇昭和十七年二月二十五日付

謹啓 益々御壮健で御過し遊ばされます由大東亜共栄圏確立の途次にある帝国への慶祝申し上げます。次に私は上海で戦死致しました故海軍大尉大山勇夫の遺族で御座います。尋常五年から死の前日まで書いていた勇夫の日記を見ますと、先生の事が何回か書いてあります。先生は日本文化の恩人とも書いてありますので、先生に御挨拶状を差上げ皮いとも何回か思ひましたが思ひ止りました。東京市も菓子が少ないと聞きましたので、どうか手に入りましたので別送申し上げます。味しくはありませんが名物で御座居ます。勇夫も大そう好きで御座いました。缶から出して直ぐお召し下さいませ。柔なりますから。

昭和十七年二月二十五日 故海軍大尉母大山セイ

徳富猪一郎大先生

(注) 封筒表 徳富猪一郎大先生侍史

封筒裏 福岡県朝倉郡安川村下淵 大山セイ代 大山半平

メアリ・フロレンス・デントン(一八五七〜一九四七 安政四〜昭和十二) 一六三〇年に英国からニューヨークに移住したピューリタンの子孫 アメリカ・ネバダ州生まれ 明治二十年パサデナの小学校校長時代、休暇中の同志社教員ゴードンと出会い、同志社で働くことになる。同志社女子部の母と呼ばれた。太平洋戦争中も帰国せず、六十年の長期に渡り、同志社教師として女子教育に尽力し、数々の功績を残した。

◇昭和十八年七月三日付(本文は英文 澤田次郎先生訳)

親愛なる友へ

この貴重なご本、大変ありがとうございました。隅から隅まで読みましたが、毎月最終日には、それを通読し続けるでしょう。この勅語が発布されるや、私は二千部を印刷させ、女生徒に配りました。この貴重な本の中であなたが書いてあることすべてに賛成です。そのことに心より感謝しています。一七七年七月四日、私たちアメリカ人の父祖たちは、ほとんど同様のメッセージをアメリカ人に書きました。歴史は繰り返すものです。

あなたには千遍感謝いたします。というのは、なぜ日本がこの歴史に残る勅語を発したか、はつきりと雄弁に語ってくださったっているからです。私は教育勅語を愛しています。そしてこの一九四一年十二月八日の〔宣戦〕詔書は、明治天皇陛下が教育勅語の中で示されたものを論理的に引き継いでいると感じています。感謝で言葉もございません。

私が同志社総長から、また同志社全体から頂いている親切とお心遣いは、口では言い表せません。 愛と感謝をこめて

(注) 封筒表 Mr. Tokutomi

封筒裏 Mary Florence Denton Doshisya Womens College

Kyoto Japan

英文の印刷「EDUCATION RESCRIPT」が同封されていた。

8 匿名の蘇峰宛書簡

戦前・戦中・戦後に匿名で蘇峰に出された書簡は四十数通ある。内容はさまざまだが、戦後に匿名で送られてきた手紙の内容はかなり激しい。

・路傍の私淑青年 昭和十四年九月

謹啓時下初秋の砌り、御病後の御消息如何ならんとよく思つて居る者でございます。何卒、君国を富嶽の安さに置く為、邦家千萬年の発展隆昌の為に、益々御健在ならんことを只管々々祈り上げ奉ります。コミンテルムの仕業らしく飲食物に毒物を混入しるらしとの事、何卒飲食物には萬全の御留意を遊ばされ度く、切に切にお祈り申し上げます。恐々敬白 路傍の私淑青年より

・差出人不明(匿名) 東京都麹町区有楽町一丁目 東京日日(御気付)

徳富蘇峯先生宛(御直披) 昭和十五年十月二十六日

関西地方デハ農村偏重結果特二中小商業者(工業はマダ良シ)は統制ト苛烈ノ禁止令デ手モ足モ出ズ疲弊シ切ツテ居ル 商売ヲ取上ゲラレテ喰ワズバ『事変ナド何ウなつてもいい・・・』の自暴自棄となり協カドコロノ騒ギデナイ 我々ノ見ル所デハ 一、物資不足 二、金融ノ梗塞、必要以上ノ警戒 三、新聞統制ノ行過ギハ不安 四、制度ノ不備ヲ言ハズ、闇取引ノ唆烈ヲ取締リ 五、失業者の続出 六、見通し難カラ来ル自己悲観 七、恐れベキ思想ノ悪化・・・等々

故二此際ハ『角ヲタメテ牛ヲ殺ス』ヨ一ナ行過ギヲ或程度是正シ同時ニ官公吏ノ独善ヲ改メ国民イジメノ感ヲ与ヘズ、先ズ自ラ範ヲ垂レル意味デ軍人、官公吏の恩給ヲ半減シ国民ト艱苦ヲ惧ニスルコト。更ニ対外的ニハ 一、汪精衛ノ尻ヲタタキ先ズ天津、上海ノ英米租界ノ回収ヲ計ルト共ニ香港ニ手入レスルコト 二、九ヶ国條約ノ一方的廃棄 三、速やかに事変の終熄ヲ(汐時ヲ見計ラヒ蔣ト和平シテモいゝではないか)ヲ図ルコト 四、一方仏印、ビルマ等の外来産地ニ対シテ強硬ヲ要求ヲナスコト 五、枢軸国ト謀リ、蘭印ノ保護占領ヲ断行シテ費ヒタイ 現在ノヨ一ニ国民が恐怖シ萎縮シ切ツテ井テハ新體制モ何モアツタモノデナク結局『いくさに勝ツテ負ケル』ヨ一ナ結果ニナリハセヌカ国民ノ一人

トシテ幽痒ユク又深憂スル者

・東京市ノ一市民 東京都大田区大森山王 徳富蘇峰先生殿
昭和十六年六月四日
下層民ノ聲

当今頻リニ新体制ノ許ニ生活改善其他ニ付キ政府又ハ府、市デハ最下部ノ町会又ハ隣組ニ重荷ヲ負ハサントシテ色々画策シテ居ルヨウナルガ一体申スマデモナク隣組ホド数十階級アルモノハアリマセン。例ヲ挙ゲレバ大中小道路ノ商店街、屋敷町ト云フ高級ノ市民層、知識階級(月給取り各層)裏通横丁住民又三尺路ジノ長屋ノ貧民層(重二層ニシテ夫婦共稼ノ工場通ヒ)等尚ホ幾階級アルカ知レマセン。之等ノ各階級ニ対シテ何等ノ差別モ設ケズ 一律一完ノ方法ダケヲ示シテ取締ロウトシテモ計画倒レトナリテ目的ヲ達スルコトハ不可能デス 又々改良セザルヲ得ザルコトニナリマス 何事に付市民ハ当局ノ方針ノ朝令暮改ナルニ悩ヤマサリ勝デス(汲取券デモ分リマス)之レト云フモ何百年来ノ風俗習慣ヲ輕視スルカラ一部ノ國民位守ルカモ知レマセンガ大部分ノ國民ハ嫌ヤガルノデス 殊ニ貧民層ニ至リテハ其日ノ生活ニ困リ勝ユエ手数ヤ費用ノカカルコトハ絶対イヤガルノデス 能ク新聞ニモ出マスガ町会長ヤ組長ノ中ニハ心違ヒノモノアリテ徂負イ不幸ノ目ニ逢フコト往々アリマス(之レハ多ク中以下ニアリマス) 何時ノ世デモ虐イタゲラレルノハ下民層故止ムヲエマセントハ思ヒマスカ先生何ント力之等ニ付キ御名案ノ一文ヲ草シ新聞デ当局ニ警告シテ下サイマセンカ 御願ヒデス 私ハ数年来日日新聞ノ愛読者デ常ニ先生ノ時々ニ関スル御議論ヲ謹読シテイル老人デス 先生ノ議論ハ尤モ有力デ千万人ノ力アリト信ジテ居リマス 先頃ノ新聞ニ今日日本ハ非常時ナルニ大政事家ニ乏ヒト云ウヨウナ事申サレタヨウニ覺テ居リマスガ 全ク同感デス ナンダカソト船頭斗リ多ク集リテ昨年以來何ニモシテイナイデアリマンカ 次ニ低物価政策ナシテ二三年以來唱テ居リマスカ各学校ノ月謝ノ高イノヤ病院ノ医療費ノ高イノヤ汽車賃ノ(大儲ケシテイルクセニ)高イニハ手ヲ付ケラレナイノデシヨウカ 之等ノ事ニモ御意見ヲ願ヒマス 先生ノ病氣御全快アラシム事ヲカゲナガラ祈リマス

・憂國青年 大阪毎日新聞社 徳富蘇峰先生 昭和十六年八月十四日
『正義の爲には日本国の存在を賭するを辞せず』とは明治維新に際し、大西郷が常に抱ける信念であつた。吾々國民は国土を焦土に化する事も敢えて辞せず、正義の爲最後の一滴迄戦ふ決意あり。何卒此点を紙上に御強調下さい。自由主義や物質主義、利己主義に骨まで腐つた國民は爆弾の洗礼を浴びせて焼直す要あり。利己主義と亡國との利害を反省しせむる要ありと確信す。

・匿名 山梨県山中湖双宜荘 徳富先生 昭和十六年九月二十三日
本日、日々の夕刊論説にて枢軸外交か多情外交かと云ふ文を拝見しました。御趣旨はわかります。而し日本一の言論者としては全くつまらん文です。今少しはつきり謂へませんか。謂へぬなら黙つて居る方がいゝでせう。先生の名譽のためにあまりつまらぬことを言はぬことです。

・匿名 徳富蘇峰先生 昭和十六年
ハリキレ國民 お國の爲に 昭和聖代 壽ぎまつりて
自由主義 社会主義 共產主義 個人主義 国家主義 軍国主義
赤化セル 大東亜の全前進 負ケルナ 近衛チーム

・大毎読者昭南生 相州熱海快樓内楽閑荘 徳富蘇峰先生 京都より
昭和十七年三月二十一日

大新聞と称する指導的存在を高唱する一流の紙上に旧体依然たる字句を用いて平然たるものが多い 大英帝国などと書くコトは、その甚しい不常識である 世界で帝国なる読字を用ふるのは大日本帝国の外には無い筈である 米大統領が議会に教書を送つたと書く場合ハ単に書を送つたとせばそれでよい 英の國商省書などと書く必要も更々ない 相当な立場に居る者が相変らず英語を混へた談話を発表するコトも大に改メなければならぬ 若い記者等へ此の誤つた常識を是正する再教育をして慾しいものです。

・一愛國者 東京都麴町区毎日新聞編集局 徳富蘇峰先生
昭和二十年九月十日

憂国警世明治―昭和三代の日本に貢献せる老先生に敗戦の苦杯を捧げんとは嗚呼。軍、官界に於ける俗物指導者により光輝ある二千六百年は過去の遺物になり、原因奈辺に在りや、挙げて教育に在り、願はくば先生「迷える一億」の為、将来生活の指針を御教示賜はらんことを我等今日在るは死より辛きものあり。(三代目横文字で書く売家札)

・沖繩郊外亡霊一同 静岡県熱海市伊豆山 晚晴草堂 徳富蘇峰君

昭和二十六年十一月十一日

おう古豪よ。僕は貴君をさがしていくともあたみに行つた。愈々お目にかかれるチャンスがきたらしい。嬉しい。たくさんの人々同胞が死んだ。苦しんだ。のたうちまはつた。古豪よ。戦時中の文章に責任は持つてゐるだろう。戦時中も貴君をさがした。若い人々を犬死させておいて老いぼれがシヤアシヤアとして生きのび、しかも、もつと野心を燃やしている！ともかくいちど會はねばならぬ。新しい日本のジャマをさせぬため。

・匿名 静岡県熱海市伊豆山 徳富蘇峰君 昭和二十九年三月

三月六日東京新聞の貴殿への抗議文読まれんや。戦争を鼓吹し軍人をおだて必勝の精神をといたことを回想しなさい。俺はいつかお前をやつつけるつもりだ。モウロク爺、お前はケダモノダヨ 無節操な奸物ダヨ。ケダモノ。

⑨ 雑誌からみた大東亜戦争

『良い子の友』

昭和十七年十二月号 大東亜戦争一周年特集

「大東亜戦争一周年ヲ ムカヘルニ アタツテ 少国民ノミナサマへ 内閣総理大臣 東條 英機」

『生活科学』

昭和十八年三月号 毎日新聞社発行

「おこる敵兵ひさしからず(米国兵の標準兵食)」

『主婦の友』

昭和十八年六月号 家庭の経済報国号

裏表紙 「婦人防空服一揃い」

『写真週報』

昭和十八年三月号十二月号 情報局編集

『写真週報』

昭和十九年三月号 「兵器は私たちで造りませう」

『主婦の友』

昭和二十年十二月号 特集「冬の食生活」

見開きページ 「進駐兵と少女」

⑩ 蘇峰の戦中・戦後の著作物

皇国日本の大道

明治書院 昭和十六年十月

日本を知れ

東京日日・大阪毎日新聞社 昭和十六年十二月

陸軍大將川上操六

第一公論社 昭和十七年一月

不二八十首

草木屋出版社 昭和十七年三月

宣戦の大詔

東京日日・大阪毎日新聞社 昭和十七年三月

興亜の大義

明治書院 昭和十七年九月

必勝国民読本

毎日新聞 昭和十九年二月

蘇翁感銘録

明治書院 昭和十九年十一月

皇国必勝論

明治書院 昭和十九年十月

蘇峰先生言志

宝雲舎 昭和二十二年三月

敗戦学校―国史の鍵―

宝雲舎 昭和二十三年七月

国史随想 平安朝の巻

宝雲舎 昭和二十三年十二月

八十七誕辰自述

晚晴草堂 昭和二十四年三月

痴人说夢

晚晴草堂 昭和二十四年三月

世界の二大詩人

晚晴草堂 昭和二十四年四月

残夢百首

草木屋出版部 昭和二十五年七月

黒潮

岩波書店 昭和二十七年

勝利者の悲哀

講談社 昭和二十七年九月

読書九十年

講談社 昭和二十七年九月

国史より見たる皇室

藤巻先生喜寿祝賀会 昭和二十八年四月

源頼朝(上)

講談社 昭和二十八年十二月

(中)

講談社 昭和二十九年一月

(下)

講談社 昭和二十九年一月

徳富静子

講談社 昭和二十九年十一月

新島襄先生

同志社 昭和三十年十一月

大谷光瑞師の生涯

大谷光瑞猊下記念会 昭和三十一年五月

(梶田明宏先生ホームページ参照 <http://www.hi-ho.ne.jp/tastevin/>)

* 今年度展示美術品

◎蘇峰八十八才の漢詩

(黒書 襖大四枚)

『近世日本国民史』は蘇峰が五十六才から九十才までの三十五年をかけて(昭和二十年十月〜二十六年一月まで中断あり)書上げた史書である。全百冊、一万七百八十一回の連作、原稿用紙にして二十三万六千枚、字数にして二千七百三十字に達する膨大な大冊である。展示した襖大サイズ四枚は、『近世日本国民史』完成直前の感慨を漢詩にしたものである。

不没功妙不学仙

功妙を没せず 仙を学ばず

険夷安歩意悠然

険夷安歩して 意悠然たり

憂長白髪三千丈

憂いは長し白髪三千丈

論定丹心五百年

論は定まる丹心五百年

門外艸深無俗客
案前埃積有新篇

門外艸深くして俗客なく
案前埃積りて新篇あり

独憐修史未終業
紹述大成期後賢

独り憐れむ修史の業未だ終わらざるを
紹述の大成は後賢に期す

蘇叟八十八

〈解釈〉

功名も馬鹿にしないし、仙術も学ばない。険しいところも、夷(たいら)なところも安らかに進み、悠然としている。憂の為に李白のように白髪が三千丈にもなった。私の純粋なまごころは、五百年後に評価されるだろう(今評価されなくてもよい)。門の外は草が生い茂り、俗世間の人には来ない。机の上にはほこりがたまっているが、新しい書物(『近世日本国民史』)がある。残念なのは、歴史編集の事業はまだ終わらない。先人の事業を受け継いで大成するのは後来の賢者に期待しよう。

(読み下し) 詩文会 石川忠久先生

◎蘇峰画 達磨絵

蘇峰は戦後数多くの自画像ともいえるような達磨絵を描いたが、特に昭和二十一年蘇峰八十四歳の時の達磨が圧倒的に多い。

- ・喫茶去 昭和丙戌五月三日 頑蘇八十四
- ・浮世夢一場 昭和丙戌七月初九 頑蘇八十四
- ・澄観 丙戌四月十八 頑蘇八十四
- ・天地一閑人 丙戌五月 頑蘇八十四
- ・曰不識 君是誰 蘇叟九十一
- ・獅子一吼百獸腦破裂 頑蘇八十五
- ・当座遣繰諸公二任ス 私シハ仮睡ノ五百年 頑蘇八十七
- ・死中快活 昭和丙戌六月念二 頑蘇八十四
- ・御高見承度御坐候 昭和二十一年六月念八 頑蘇八十四
- ・コレデモヒトカ 昭和丙戌六月念九 頑蘇八十四

◎川端龍子画 「蘇峰立像」

(軸物 117×175cm)

蘇峰米寿の祝いとして有志が川端龍子に頼み描いてもらったもの。

◎蘇峰書 「自主日本」

昭和三十年 蘇峰九十三 (軸物 70×133cm)

◎端古の硯

蘇峰所蔵の貴重な硯 「皇位七十三代堀河天皇時代 元祐五年 梅庵 今より八百四十五年前ノ作」という説明が添えられている。

蘇峰堂便り

幼い頃、寒冷地で育ったので、朝早く目覚めると机の上に水を入れて置いておいたグラスに稲妻のようなひびが入っていることが頻繁にあった。水が凍って膨張し、外側のグラスを割ってしまったのだと説明されたが、「膨張」という現象の、恐ろしくてとてつもない破壊力ばかりが強い印象として心の奥底に残った。

本年度は大東亜戦争をテーマとして取り上げている。小さな島国に芽生えた「膨張」といううねりは、日清・日露戦争を経て、最後には想像を絶する大きな犠牲を背負う形で幕を閉じることになった。世界地図の上に「大日本帝国」を築き上げる夢は見事に砕け、「世界の一等国」「東洋の覇者」という、戦時中新聞・雑誌で叫ばれた日本を鼓舞する呼び名は、戦争を体験した人々の心の中では、今でも不穏な響きを持ちながら残っているのではないだろうか。

時間は決して伸びたり縮んだりすることなく、戦後61年が過ぎた。戦争責任・歴史認識が声高に叫ばれているが、膨張の結果として残った稲妻のような深い傷跡に、その場しのぎの処方で薬を塗ったり貼ったりしても、それを癒すことは困難を極めるだろう。

今年度の展示で扱ったテーマは、日本人として決して避けてはならない問題である。展示のための資料にあたっては、戦争という時代を生きた多くの人々の生の声を聞くような気がしてならなかった。それぞれの立場から発せられた声に答えるためには、今よりもっと心の体積を増やさなければならぬと痛感した。ぜひ記念館の2階特別展示室の壁に並んださまざまな表情の達磨たちと向き合っていたきたい。心が驕って気持ちが大きくなり、自分をすっかり見失うようなことがあったら、物事を静かに澄観しろとじっと睨

みかえされそうな気がするかもしれない。

宮崎松代

その日私は、ある研究者から依頼された徳富蘇峰宛書簡の複写をしていた。書簡の差出人は朝鮮半島の人で、全部で12通あり、そのうちの5通は本名で書かれ、あとの7通は創氏改名による日本名で出されていた。差出年でみると、昭和10年から昭和12年までの5通が本名、昭和15年から昭和18年の7通が日本名である。創氏改名を強制した政策は昭和15年から施行されたので、差出名が変わった時期とその事実がピッタリと符合する。

「自分の名前を他国の名前に改名させられる」とはどういう思いになるものだろうか。経験を持たない私の想像力では、その思いに近づくことは出来ないような気がした。

創氏改名が行われた時代の日本の多くの一般市民は、教育によって自由な想像力や思想が抑制されていて、改名を強制された人々の悲しみに気付くことは、今より難しいことだっただろう。

常に相手の立場に立つ姿勢は、容易ではない。違った文化や歴史を理解しあう努力や、豊かな感受性と想像力が必要だろう。そのためには知的自由がコントロールされない社会であることが何より大切である。

どんな国の歴史にもよい面と悪い面があることを私は達は学んでいる。大切な事は、その刻まれた過去の歴史を直視する勇氣と批判する能力を持つことである。その力が未来を切り開くことになるのではないか。

12通の書簡を複写しながら、そんなことを思った。

和田 千枝

編集後記

・吉田正信先生より「国民新聞」のマイク
ロフィルム、伊藤漱平先生より、大谷光
瑞・満鉄・満州関係などの貴重な書籍を
計百二十四冊御寄贈いただきました。

・大井美代子先生と高橋信弘先生のご指導
により、記念館所蔵の書籍の整理を始め
ました。

・念願の「徳富蘇峰終戦後日記―『頑蘇夢
物語』が講談社から、平成18年7月に発
行されました。61年間、出版を期待し、
待ちかねた本でした。

蘇峰先生は人との交遊を大切にしていま
した。

父・塩崎彦市が蘇峰先生から託された資
料を大切に守り、学生や研究者に好意的
に提供していた姿を思い出します。

蘇峰が残した資料が次の世紀に続くよう、
この先も守っていきたいと思っております。

学芸員 高野静子

平成十九年二月二日発行

編集 高野 静子

発行者 竹越 起一

発行者 (財)徳富蘇峰記念塩崎財団

〒五九〇三三 神奈川県中郡二宮町二宮六〇五

TEL 〇四六三二七一一〇二六六

FAX 〇四六三二七一一〇六七七

ホームページ

<http://www.2ocn.ne.jp/~tsoho/>

E-mail: tsoho@peach.ocn.ne.jp